

昭和三十四年

五月二十三日

発行第三種郵便物認可  
毎月一回・十五日発行

(通一八一號)

# 慈光

第十六卷

第五号

## 目次

「教行信証」欲生釀 (四)	近角常観 (1)
善財童子の求道	福島政雄 (10)
ある日の父	池山寿夫 (13)
堂の鈴 (十六)	佐藤強三郎 (17)
鳩	花田正夫 (22)
鷹	
と	
鳩	

# 『教行信証 欲生釈』

(四)

近 角 常 観

## 二河白道の譬喻

次になりて

『真に知んぬ。二河の譬喻の中に、「白道四五寸」と言うは、白道とは、「白」の言は黒に対するなり。「白」は即ち是れ選択攝取の白業、往相廻向の淨業なり。「黒」はこれ無明煩惱の黒業、二乘、人天の雜善なり。「道」の言は路に対する也。「道」は則ちこれ本願一実の直道、大般涅槃無上の大道なり。「路」は即ちこれ三乗、三乘、万善諸行の小路なり。「四五寸」と言うは、衆生の四大、五陰に喻うるなり。「能生清淨心」と言うは、金剛の真心を獲得するなり。本願力廻向の大信心海なるが故に、破壊すべからず。これを金剛の如しと喻うるなり』

これよりは聖人御私釈の御文であります。『二河の譬喻』というは、言うまでもなく二河白道のお譬えのことである。二河白道のことは皆様御存じのことであるけれども、初めての方のために簡単に話すに、先ず注意すべきは、従

来これを聴き馴れて居る人は、譬喻の方に力を入れて、これが各自の心中の有様なる事は知らぬでは無けれども、どうも其処がしつかり頂けぬという憾みがある。

又、今迄仏教をよけ、聞かぬ人は、西洋の宗教に『天路歷程』などの内心の経験を描いた書物のある事は知つて居ても、仏教の淨土門に斯くの如き立派な尊き譬喻のある事を知らぬ人が多いのである。

故に今手短かに申しますに、これは善導大師が、我々が今の大遣瀬無きお慈悲を頂き、信じた様を、この譬喻であらわし下されたのであります。昨年の会にはこれを善導大師の本文で拝読させて頂いた事である。今も分りよいように、善導大師の本文に就いてお話するに、

『又一切の往生人等に白さく。

今更に行者のために一の譬喻を説いて信心を守護し、以て外邪異見の難を防がん。何者か是れや。

譬えば人有つて西に向つて行かんと欲するに百千里あら

つて此の人を殺さんと欲す。死を怖れて直に走つて西に向うに忽然としてこの大河を見る。』

人ありて西に向うて行こうとするに、百千里の道程があつて、忽然として、中間に二つの大河がある。一つは火の河、南に在り、一つは水の河、北に在る。而してこの二河何れも広さ百歩、各深くして底無く、南北に向つて涯が無い、とである。

而してその水火二河の中間に正しく一つの白道があつて、其の道幅、四、五寸である。此の道、河の東の岸より西の岸に亘りて、同じく又長さ百歩である。而して道の両側なる水の河よりは、波浪交わり來りて、頻りに其の道を湿し、火の河よりは、火焰來つて其の道を焼き、水火常に相交わつて少時も休む間も無い、とあります。かかるに、

『此の人既に空曠の迥なる処に至るに、更に人物無し。多く群賊惡獸のみ有つて、此の人の単独なるを見て、競來

つて此の人を殺さんと欲す。死を怖れて直に走つて西に向うに忽然としてこの大河を見る。』

即ち自ら念言すらく。此の河、南北に辺畔を見ず、中に一つの白道を見る。極めてこれ狹少なり。二岸去る

こと近しと雖も、何に由つてか行く可き。今日定めて死せんこと疑わず。』

「こんな大河がありては仕ようが無い。もう殺されるより仕方がない」と、再び踵を廻らしてもと来た方に遁げようとすれば、

『正しく到り回らんと欲すれば、群賊悪獸漸々に來り逼む。正に南北に避け走らんと欲すれば、惡獸毒虫競い来て我に向う。正しく西に向つて道を尋ねて去かんと欲すれば、復恐らくはこの水火の二河に墮せんと。その時に惶怖すること復言う可からず。』

即ち今の群賊悪獸が鋒を逆まにして逼り近づいて来る。これではなんと、今度は南北に脱れ奔ろうとすると、又このたびは惡獸毒虫が競い来つて我に刃向つて来る。

それかと言つて又西に向つて道を辿つて行こうとすれば、今の水火の二河に墮せんこと疑い無い。この時にあたりて、此の人、最早して見ようなく、惶怖すること言つばかり無い、とあります。

そこで今の南北に奔ろうとすれば惡獸毒虫が競い刃向つて来るというは、是れ我々の心中に、種々なる嫉み妬みの

して以て全癒を期したリレが、不幸その効を奏せず、切開又切開、遂に六回に及び、右頬下半部を全く切除し去るの苦痛を嘗む。真に無告可憐の窮状にあらずや。之に加えて片眼まさに明を失せんとし、且つ耳の下辺は吹衝を起し、その苦痛の状、到底筆紙の尽すべきに非す。

これらの苦痛漸く減ぜんとすれば、又舌根の苦痛これに次いで起り、その状恰も時々刻々余の身体を誅殺せんとするものの如し。……病苦が漸々加わつて来ると、苦しくて最早何ともして見ようが無い。斯くなると日頃頼み置きつる妻子も財宝も、何の役にも立たぬ。身体の苦痛、精神の苦痛が一時に四方より群り起つて、我を苦しむことは、實に時々刻々、余の身体を誅殺せんとするものの如くである。

……これが現時の実状にして、これを思ひ彼を考うれば、現世生存の趣味、何によりてかこれを解せん。狂するが如く、乱するが如く、この五尺の体軀を如何に処して可なるべきやを知らず。夢の如くにして夢に非ず。我にして我に非ず。進まんか進むに由なし。退かんか退くに処なし。

斯くの如くにして余は實に煩悶苦斗の極端に達し、人類の失心する、正に此の苦痛の一瞬時にあるを思ひしむ。實に福間氏の此の苦痛である。これが、今の二河白道で、

情などが、我々を苦しむる事である。

又群賊悪獸が鋒を逆にして我に逼つて来ると云うは、先に言う種々なる荒々しき思ひの外、諸種の外界の誘惑が、

眼耳鼻舌身より入りこんで、我々の心中を搔き乱す、つまり種々なる煩惱妄想が我々の心を惑乱することである。これら皆、我々の心中に在ることなのである。

又水火の三河と云うは、水河は我々の貧乏の心である。

我々の心中に貪欲、愛欲の風波がさか巻く事である。

又火の河は、即ち我々の瞋恚の炎である。我々の心中がこれら種々なる渙間しき心に四方より攻め立てられ、何とも仕て見よう無き苦惱の有様であります。

さて斯く話すと、数年前、福間久米吉氏が病中信仰に入られた様を思い出すのであります。福間氏が癌に苦しめた時、病中信仰に入り、書かれたものに『獲信の記』なるものがある。

臥病十ヶ月、懊惱苦悶、心意の休慰何れに依るも要め得るものなし。身體進止の不自由は云々迄もなく、食餌の如きも漸く飲送して、僅に饑渴を充たすに過ぎず。口舌は啞して其の用をなさず。

抑も余の病性たる、口腔内に発生せる難質の腫物にしてこれが治術の初めに当り、下頸骨の右方三分の一を切取

進退行き詰つたる苦しみなのであります。

で、今の二河の譬えで、其の旅人が群賊悪獸に追ひ立てられ、遁げようとしてたと水火の大河に行き当つた。見ると其の間に一つの白道がある。あることはあるが、其道なくして仕方が無い。

さればとて後に戻ろうとすると今の群賊悪獸がやつて来る。それかとてじつとして居れば、惡獸毒虫に刺されてしまう。のみならず、前は火の河、水の河である。是れ我々の進退行き詰つて、何とも仕て見よう無き處である。私など苦しんだ時は、人に自分より、善くすれば善いとは知れども、其の善くする事が出来ず、それかと言つて放つて置く訳にもゆかぬ。皆さん達にしても、信仰を得たいが、其の信仰が得られぬ。得られぬからとて、得られる時節まで待てるかと言うに、待つて居られぬ。何ともして見ようが無い処が、實にこれである。でもう何とも仕て見ようが無い。其人、そこで遂に思ひには

『即ち自ら思念すらく。我今回らば亦死せん。住まるも亦死せん。去かば亦死せん。一種として死を免れずば、我むしろこの道を尋ねて、前に向うて而も去かん。既にこの道あり、必ず應に度すべし。』

「もう何とも仕ようが無い。兎も角、ここに水火の間に一條の道があるのである。これがあるからは何とかならぬ事あるまい」と、其の道を渉る事に決心した。というは「人生もう宗教の外は無い、兎に角、この道があるからは、これを求めるより仕ようが無い」となつた処である。

と思うと、忽ち東岸より人あつて呼んで言うには、

『この念をなす時、東の岸に忽ち人の勧むる声を聞く。仁者但決定して、この道を尋ねて行け。必ず死の難無けん。若し住まば即ち死せん。』

「その道を行くと間違い無いから、わき見せずに真直ぐに行け！」と言つて下さる声が聞こえる。それかと思うと、又西岸上に人あつて喚んで言うには

『又西岸上に入有つて喚んで言わく、汝一心正念にして直に来れ、我能く汝を護らん。すべて水火の難に墮せん事を畏れざれ』

と呼びかけ下さる声がある。とは言うまでもなく東の岸の声とは、釈尊初め諸の有縁の善知識の御教化である。その善知識の御教化の下に、西の方に振り向くと、西の岸の上

「……直に来れ、我能く汝を護らん。すべて水火の難に墮せんことを畏れざれ」……「そのして見よう無き汝を助けたいばかりにあらわれた我なれば、如何に水火の難があるうが、如何に煩惱妄念が有るうが、決して間違わぬぞ」との遣る瀬なき招喚の呼び声なのであります。

そこで先の福間氏の『獲信之記』には、その苦しみ極つた処に、どうあるかと言うに、直ぐ続いて

『その刹那、その瞬間、ふと「余は仏陀が吾人を助けたまうと云うことを聞きしものに非ずや」との一念、余が心頭を刺激したり。それは他無し。今春病臥以来、長子甲松が余の病苦の状と精神の煩悶を見るに忍びず、一日寸時たりとも心意の慰安を得せしめんと思惟せし為か、佛教界の長老、村上、前田、菅瀬、近角の諸師に枉鶴を請い、余に法教を聴聞せしめこと屢々なりき。これ余がこの苦悶の瞬時、計らず仏陀の救濟を感想したる次第なり。而して此の一瞬時の回想により、今の今まで堪え難かりし迷惑煩悶は頓に余の心頭より四散して、余は期せずして夢の如く、自然と口こ南無阿弥陀仏の名号を誦唱したりき。噫。……』

その苦痛の絶頂に達して、人生一切の物が當てにならぬ、自分の妻子も何の甲斐も無いとなつた時、其刹那、その瞬

の呼び声とは、即ち阿弥陀仏の本願である。我々お婆は拼命ねども、西岸上に遭る瀬なき西岸上の聲がましまして、我々が、この行き詰つたる有様を御覽下されて、呼びかけて下さるには「汝、……」汝とは、その仕て見ようなき私を指して直接汝と呼びかけて下されたのである。『愚癡鈔』のお言葉には

『西岸上に人有つて喚んで言くとは、阿弥陀如來の誓願なり。汝の言は行者なり。斯れ即ち必定の菩薩と名く』汝の言を、必定の菩薩と名くとは、即ち仏より我々の身上を、汝と名指して呼びかけ下されたる。その呼びかけられたる一念に、今は進退詰まつたる我々が「あら有難や」と振り向いた一念が信の一念である。其の一念に攝取不捨の御利益に預かるのであるからであります。而して、「汝一心正念にして直に来れ」——一心正念とは、汝一心正念になつて来い、との仰せではない。斯く最早行き詰り、仕て見ようなき我々に、仏より汝と呼び声が聞えて下された一念には、何人も「やれ有難や」と、其の呼び声に振り向き頑かざるを得ぬ。その一念が即ち一心正念である。

「直に来れ」は、其の呼び声を聞くなり、言下に「有難や」と、即ち直にである。呼び声を聞いてからこの悪い者が修行して行かんならぬのなら直ちにでは無い。而して、お見捨て無き広大のお恵みが分り、今まで堪え難かりし、迷惑煩悶は頓に四散して、余は覚えず、夢の如く、南無阿弥陀仏と念佛したがあるのである。

茲は福間氏がどうして其の時よろこんだか自分にも分らぬも、今現在して見ようなき自分如きを見捨て給わぬ親の慈悲と聞いて居るではないか。と一念心中に思い浮んだ時、我を忘れて南無阿弥陀仏、々々々、と、初めて念佛がおのずから口を衝いて現れたとであります。

で今の二河自道に於いても、其人遭る瀬なき西岸上の呼び声を聞くなり、

『此の人、既にここに遭し、かしこに喚ぼうを聞きて、即ち自ら正しく身心に當てて、決定して道を尋ねて、直ちに進んで疑惑退心を生ぜず。……』其の仰せの言下に安心して、道を尋ねて往くと、決定が出来たのである。して、次に、

『……或は行くこと一分二分するに、東の岸の群賊等喰

ぼうて言く、仁者回り来れ、この道嶮惡なり、過ぐることを得ず、必ず死せんこと疑わす。我等すべて悪心ありて相向うこと無し。』

一步二歩行きかけると、先の種々なる群賊惡獸が「そんな道行くと危いから帰れ／＼」と呼び戻す、といふは我々の心内にやゝもするつまらぬ世間の思想等に動かされ、疑惧の念を生じ来る事である。けれども、

『この人、喚ぼう声を聞くと雖も、亦回顧みず。』

遣る瀬なき呼び声を耳にしたからは、何程あとより呼びかけられても、最早振り向かない。

『一心に直に進んで道を念じて行けば、須臾に即ち西の岸に到つて、永く諸難を離れ、善友相見て慶樂するこそやむこと無からんが如し。此は是れ喚えなり』

一途にお見捨てなき仰せを喜んで行くと、須臾にして大悲の膝許に参り、諸の善友に遇いて、慶樂極まり無い、とであります。

さて、これより合法の文になりて、之を読ませて貰うと『次に喻えを合わせば、東の岸と言ひは、即ち此の娑婆の火宅に喻うるなり。群賊惡獸いつわり親しむと言ひは即ち衆生の六根六識、五陰四大に喻うる也。無人空廻の沢と言ひは、即ち常に惡友に随つて、真の善知識に値わ

ざるに喻うるなり。……』  
無人空廻の果てしも無き曠野にさ迷うて更に人物も無いとは、我々が生死の人生に漂うて、日夜、善し惡しの問題以外、いまだ眞の善知識に出遭わぬに喻えるとの仰せであります。  
『……水火の二河と言ひは、即ち衆生の貪愛は水の如し、瞋憎は火の如しと喻うるなり。いまし貪瞋強きに由るが故に、即ち水火の如しと喻う。善心微なるが故に白道の如しと喻うるなり。又水波常に道を湿すとは、即ち愛心常に起つて、能く善心を染汚するに喻うるなり。又火焰常に道を焼くとは、即ち瞋嫌の心、能く功德の法財を焼くに喻うるなり。……』

水火の中間に一つの白道があるとは、衆生の貪瞋煩惱の胸の中に、有難や、一人の親がこのものを捨てぬと広大のお心で向わせられてある。其の親の遣る瀬なき呼声が、ひとつ耳に入る時は、如何にもお見捨て無き慈悲の有難いと、広大の清淨願往生心の生ずるに喻えるとの御文である。而して其の親の御慈悲をひとつ耳聞いた心は火にも焼けず、水にも溺れぬ。遂に親の膝許に行きつくまで、いよいよ明かにかがやいて下さる白道であるが、初めから明か

になりづめではない。時には貪愛の水波に蔽わることもあれば、瞋憎の火焰に焼かる事もある。斯く貪瞋煩惱の少時もやまぬ私の胸中故、甚だ幽かれども、其の下から常に、お変り無く続いて下さる信心の白道故、即ち四五寸の細き白道とあるのである。

次に続いて、

『……人、道の上を行きて西に向うと言うは、諸の行業を廻して、直に西方に向うに喻うる也。東の岸に人の声ありて勧め遣すを聞いて、道を尋ねて直に西に進むと言ひは、即ち积迦すでに滅したまいて、後の人見たてまづらざれども、なお教法あつて尋ねべきに喻う。即ちこれを声の如しと喻うるなり。

或は行くこと一分三分するに群賊喚び回すと言ひは、即ち別解、別行、惡見の人等、妄りに見解を説いて、たがいに相惑乱し、及び自ら罪を造つて退失するに喻うるなり。

西の岸の上に人有つて喚ぼうと言ひは、即ち弥陀の願意に喻うるなり。須臾に西岸に到つて、善友相見て喜ぶと言ひは、即ち衆生久しく生死に沈んで、曠却より輪廻し、迷倒して、自ら纏うて、解脱するに由無し。仰いで积迦發遣して指えて西方に向けたまうことを蒙り、又弥陀の悲心招喚したまうによつて、今二尊の意に信順して、水火の二河を顧みず、念々に遺ることなく、彼の

頼力の道に乗じて、捨命已後、彼の国に生ずることを得て、仏と相見て慶喜すること何ぞ極まらんに喻うるなり。已上』

実に斯くの如くあるが、善導大師の二河白道の譬である。これは皆さん御存じの処であります。

なお序に、以上を絵にあらわした二河白道の絵があつて、皆さん御存じの事であるが、石見の益田町には、弘法大師の筆と称するのがあつて、そこには水火の河の中からも、一面に蓮華が生えてある。先年拝ませて貰うて、殊に有難く感じた事であります。

さて以上の二河白道の譬喻が、今席の処には出て来たのであります。即ち、

『真に知ぬ、二河の譬喻の中に、白道四五寸と言ひは、白の言は黒に対するなり』

善導大師が、二河の譬喻の中に、最も肝心の信心の一道を白道四五寸とお示しらせられた。今その思召しを頂くに全体、白の言は黒に対するお言葉である。其の白とは何かと言ひに、

『白は即ち是れ、選択攝取の白業、往相廻向の淨業』  
阿弥陀仏があらゆる往生の行業の中より、これなら如何なる愚痴無智の者も称えて往生する事が出来ると、選択攝取

して下された処の、南無阿弥陀仏の六字の淨業が白である。即ちこれなら如何なる者も頂いて極樂に往くことが出来ると、選びに押んで与えて下された処の往相廻向の大字名号の事である。又その反対の黒とはどうかと云うに

「黒とは即ち是れ無明煩惱の黒業二乘人天の報善なり」  
黒とは、我々の心中の無明闇黒の煩惱の事である。即ち  
人に善くするとか、せぬとか苦しんで居る二乗や人天  
毒雜りの善のことである。又、

「道の言い路は妙でながれ道といひ見せざる、不順とす。」  
の直道、大般涅槃の大道なり。路とは則ちこれ二乘三乗  
万善諸行の小路なり。」

「四五寸と言うは、衆生の四大五陰に喻うるなり」

のでない。頂いた我々の体内にある。四大五陰は我々の体を形造る諸の分子である。その四大五陰より成立つて居る我々の肉体、その小さい体内に「有難い」と真に頂いた信心が白道である。故に広大なる白道なれども、我々の四大

善財童子の求道

この前、この善財童子のお話は、善財童子が觀世音菩薩を訪ね、それから大天という神様のところへ行き、それから大地の神のところへ行つて教をうけたと、そこまで話しました。よう記憶いたしますが、今日はいよいよこの華厳經のしめくくり、最後のつもりで申し上げて見たいと思ひます。

夜天の意味

今までのところは四十華厳によつてお話をいたしました。その四十華厳の私の持つて居りました本はこれであります。てへ先生御本を皆に示されました。これをよく読むということは出来ませんでしたけれども、まあとびとびのお話のようなことでお話しして参りました。

今日は、六十華厳によつて、いよいよ善財童子の最後に近い善知識、と申しますのは、菩薩の五十二位と申しますが、仏の位にまで行くのに五十二の階段があると申されてあります。その第四十一から五十まで、この十であります。が、これを十地、十の土地の地であります。この十地の初

未完とのお知らせであります。

源信僧都繪像

「この二河白道の譬にあい逢うは、人界に生を受けし、  
その徳ニニニあり一

つねにこれを見て、歓喜の涙、連々として絶ゆる期なき  
なり。

めが歓喜地という風なところがいつてあります、心が非常に歎ぶのであります。それから第10は法雲地、みのりの雲と書いてあります。この歓喜地から法雲地まで十の階段と申しますが、その十を代表する善知識を次から次へと歴訪するのであります。

福  
皇  
政  
雄

八

正

雄

冬の夜

三番目は喜日観察衆<sup>きらくかんざう</sup>生夜天<sup>じゆやてん</sup>といいまして、喜びの眼をもつて衆生を觀察する夜の空<sup>そら</sup>、といい、

四番目は妙徳救護衆生夜天といつて、妙なる徳をもつて衆生を護つて救うて下さる夜の天といいまして、五番目は寂靜音夜天、しづかな夜のひびきでありましよ

五陰の小さき体内に頂く白道故、四五寸であります。次に『能生清淨願心』と言うは、金剛の真心を獲得するなり、本願力廻向の大信心海なるが故に、破壊すべからず。これを金剛の如しと喻うる也』



# ある日の父

池寿夫

(註) 四月五日の一道会の日曜例会に、寿夫先生が御参会下さいましたので、かねてからお願ひしたいと念じて居りました「山先生の思出」のお話をして頂きました。更にお願いして、そのお話を筆にして頂きました。

聚墨生

母が亡くなつたのは大正七年五月、数え年で母が三十九歳、父が四十七、私は十九の時でありました。

その前年、初冬の或る日、夕方家中帰つて来た私は、何だか家の中の空気が変なに気がつきました。母の様子も違うし、父もすつかり違つてゐる。何かあつたな、とは思いましたが別に聞きもしませんでした。ところが夜になつてから母が

「寿夫、一寸おいで」

といふのです。行くと母は静かな句調で

「母さんは胃癌だとさ。今日病院で診てもらつてハツキ、リ判つたんだよ。お前、しつかりしておくれよ」

と言いました。かねて胃の調子の悪かつたのをリヨウマチスの薬のせいとばかり思い込んでいた母の胃癌は、もう相当病状が進行していたようあります。

にも、母は一切手を出しませんでした。

こういう母の姿を見、又まだ床にはつかぬままに、段々と衰えが母の顔に現われ出しますと、私の心も日に々切迫つまつたものになつて行きました。どうしたらよいか判らぬ焦燥、夜おそく父と母とが話し合つてゐる姿を見て、逃げるように自分の勉強部屋に閉じこもつてしまつた事も何度もあつたか判りません。

年末の学期試験中のことでした。夜も更けて、余り寒いので少し炬燵にあたろうと思つて居間に行くと、母がまだ寝ないで一人で炬燵にあたつていました。差し向いに炬燵に入つて、見るともなしに母の顔を見ると、衰えがクツキリと出でています。ツイ堪らなくなつて、私は額を掛蒲団に押しつけて泣き出しまいました。母の前では泣くまいと決心していたのですが。

「なんだねえ、寿夫」と母がたしなめました。

「母さんに、御恩も返せないとと思うと……」と私が言いました。とびつくりするような強い調子で母の言葉がハネ返つて來たのです。

「馬鹿だね、お前は！ 馬鹿だよ！ 恩を返えして貰おうと思つて子供を育てる親なんかありやしないよ！」

悪い言葉は刃で傷つけるよりも深い痛みを人の心に跡付けると申します。人に与える馬鹿という言葉は恐ら

くその代表的なものでしよう。だがしかし、私はこの「馬鹿」で救われました。その後四十五年間、この私をいつも励まし慰め、しつかりと抱きしめてくれたのは、この「馬鹿だね、お前は」という母の言葉でした。

母が亡くなつたのは前述のように大正七年五月、庭にイチハツの花が競い咲いていた頃でした。

出棺は午後三時とされていましたが、午前中から沢山の方々がお悔みに来て下さいました。勿論私達は遺族として棺側に侍して弔客にお札を申さねばなりません。ところが午前十時過ぎた頃、父は私に

「あの屏風をあそこに置いておくれ」と、棺の安置してある部屋の隅を屏風で仕切るようにいうのです。それは母の病床の枕元にたてるために、歎異鈔第二章と第九章の夫々一節を近角先生がお書き下さつたもので、二つ折の大きな屏風でした。

だからその屏風によつて、部屋の一隅は外とは全く別交渉な場所となつたわけでした。

そして父はその中に引込んでしまつたのです。誰方がいらっしゃつても出て来ない。お経があげられ出しても出て来ません。客の中には「先生は」と私にたずねる方もあります。私も「父さんも出ていないと皆さんに失礼になるのではないかだろうか」などと考えまして、たまりかねて二時

山寿夫

よろ

う

頃に、屏風の中をのぞき込みました。そして其処に、ハンカチを驚撫みにして目に押しあてて、必死に声をしのばせつづ泣きくずれている父を見たのです。

私はそのまま屏風の外に出て来ました。ほんの一瞬見ただけですが、悲しみに打ちひしがれたこの父の姿は、焼きつけられたように私の眼底に残されて居ります。

胃癌と宣告されてから亡くなるまでの丸半年間、五人の子供を前にして、母も父もどんなにか苦しかったことでしょ。当時は、私自身も苦しみましたし、母や父の苦しみも判つてゐるよう思つていましたが、今から思えば、その千分の一も、万分の一も判つてはいなかつたのでしょうか。では今は判つてゐるのかといえば、矢張り判つては居りますまい。ただ、判つていないと、だけが判つたのです。

所詮、人間は独りなのだと思ひます。私達はよく、同情するとか、されるとか申しますが、人の悲しみを本当に判つてあげることも出来ないし、自分の悲しみを判つて貰おうというのも無理なではないでしょうか。淋しいが、それが人間同志に与えられたすがたなのではないでしょうか。だが父は私に

「人間は独りだがねえ、その人間が、私は一人ではなかつたと、わからしていたたく時が来るんだよ」

と言つたことがあります。一人いてよろこばば二人とおもべし、とは、一人いて悲しまば二人と思ふべし、であります。喜びにも悲しみにも、苦しさにも樂しさにも、どんな世界にも境遇にも

「私も一緒にいるんだよ！」

とついて来て下さる御一人、この御一人ありてこそ独りの人間が一人でなくなるのでしよう。

母が亡くなつてから二三年たつた頃、私は父に「お前は馬鹿だよ！」と母にいわれたことを話しました。父は黙つてきいていて、しばらくそれを噛みしめるようにしていましたが、例の柔軟な目差しで庭を見ながら

「馬鹿は、お前だけではないよ」

とポツンと言つて、湧き出るようにお念佛を唱しました。

私は今考えます。人間は何とはかない抵抗や、無駄なあがきをし勝ちなことでしょう。ああせねば、こうせねば、せねば／＼に追いまくられて、時にはその通りに為し得たかのように自惚れたり、時には出来ぬ／＼で悩んだり、かしこき思いの具し通し、よしあしとのみ言い通し、み親の御心に思い及ばぬ愚かさ、しみじみと「馬鹿は、お前だけではないよ」との父の言葉を想い起します。

た。どうも、父は矢張り孫びいきのようです。

昭和三十九年四月十四日、夜。

### 聞光願生 清水凡秀

私は、父がもう死んでいるということを忘れて暮らして居ります。妙な言い方ですが、隣りの部屋で、好きなお茶でものんでいるような氣がするのです。これは、私が父の生前から遠く離れて暮らして、その臨終にも立ち会えなかつたというような状態が、却つて役立つてゐるのかも判りませんが、とに角、そうなのです。私が年をとるにつれて、この気持ちは益々強くなつてしまりました。

妙なものですね。同じ家の中に居合わしても、間の襖をしまればお互の顔は見えません。同じ部屋に居合わせてさえ、ソッポを向き合えば、離ればなれです。けれども、心と心が通い合うところ、距離のへだたりも、時の流れも、生死の区分さえ、心と心を別れさせることは出来ません。縱と横とかに離れさせることはできても、別れさせることは出来ません。ありがたいことです。

私には三人の子供があります。もうみんな大きくなりましたが、元來が短気な私のこと、よく子供に腹を立てたもので、いつもきまつて父がニコニコ笑つて出て来るのです。そして

「寿夫よ、でもお前よりはマシだよ」

といふのです。それで私はいつもペシヤンコになりまし

春光うらゝかな時はお念佛もなだらかに出て、これも仏様のご方便と有難く味わさせて頂いているが、一度利害打算の上、感情の上に黒雲が巻き起ると、とんでもない怒濤が逆巻いて何もかにもが判らなく、無我夢中になつて果てしなく悩む。

不思議や、その悩む姿を明瞭に見るいま一つの自分がいた。悩む根本はこれではないか、何と呆れたお前ではある、それが判らぬかと呼ばれる。唯事ではない、何としたお働きだろう。だん／＼明瞭になるにつれて、愈々この私が如來様のお目當であつた、誰でもない、たつた一人の私が目的とされてあつたのだと氣付かされた時に、唯々広大なみ親のお慈悲のほどが拝まれる。

堂の鈴（十六）

佐藤強三郎

雄三の母（二）

毎日仕事も手につかず、食事の時なども物をこぼして考えこみ、一人で「偽善の私をどうしよう」と苦悶した。家に居たたまれば、或日、また信哉をたずねた。母はどんな風に聞けばよいか、と迷つている様子である。

信哉はニコ／＼して語り出した。

信哉「雄三君は、病気がいよいよ重くなつて来た時に、たすかるとは本願を信することでしょうか……、と、聞きました。

そうです。

私共の氷が、いかに大きからんとも、堅からんとも、これがためにさまたげられぬ無限の光明に照らされば、遂にはその罪惡の氷が解けて、そのまま菩提の水となる。即ち罪惡の心が、それを憐んで、どこ／＼までも呆れないお慈悲のために懺悔の涙となる。即ち、本願を信するため、菩提の水に転ずるのである。

聖人の御釈に、転ず、というは、惡をそのままにおきて

ひとえに、とはこればかり、これのみにて十分である。

他のものを雜じえざることである。正信偈には、阿弥陀仏の本願を憶念すれば、自然に即時に必定（淨土）に入る、とあり、

御和讃には、

○聖道権化の方便に衆生ひさしくとどまりて

諸有に流転の身とぞなる悲願の一乗、帰命せよ

○極悪深重の衆生は他の方便さらになし

ひとえに弥陀を称してぞ　淨土にうまるとのべ給う

○生死の苦悔ほとりなし　ひさしく沈めるわれらをば　弥陀弘誓の船のみぞ　のせてかならずわたしける

○五濁悪世の我等こそ　金剛の信心ばかりにて　ながく生死をしてはてて　自然の淨土にいたるなれ

○念佛成仏これ真宗　万行諸善これ仮門　權実眞仮をわかつして　自然の淨土をえぞしらぬ

と、お示し下され、勿体なくも、わが御身にひきかけられて、愚癡親鸞とまで申されました」

善となす、とあります。

||救けるとは、罪を覺悟させて、自然に懺悔させることである。||

信哉「破戒、無戒、愚痴、無智の凡夫を、かくの如く即時に覺悟せしめるものは、他力真宗の、無碍の本願力のみである。||さればよきことも、あしきことも業報にさしまかせて、ひとえに、本願をたのみまいらすればこそ、他力にてはそらえ。||

×××

×××

×××

信哉「親鸞聖人は、法然聖人（源空）の御事を、和讃で、

○曠劫多生のあいだにも出離の強縁しらざりき　本師源空いまさづば　このたびむなしくすぎなまし

○阿弥陀如來化してこそ　本師源空としめしけれ

化縁すでにつきぬれば　淨土にかえりたまいにき

と崇敬し、帰命されました。有り難い事で御座います」

雄三の母は、しんみりと話をきいて、飽くことを知らぬ様子である。

信哉「親鸞におきては、ただ念佛して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人のおおせをこうむりて信するほかに別の子細なきなり……」

このうえは、念佛をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからいなり。……と仰せになりました」

雄三の死後、信哉は度々訪れて、仏前にお経をあげた。そして母とよく語つた。



におまかせして、安心していつたのであらう。

そのため、言い落したことがあると、残念がる様子もなく、

どうしてもこれだけはやらねばならぬ、出来なければ死んでも死に切れぬ、と力んで不安がるところもなく逝つた。

ああ、私もこのよろこびを強いて人に語る事もいらぬ。

私のこの歓喜は、……仏は御存じであろう。……。

信哉さんも、雄三も承知の筈だ。遠く親鸞聖人へも、通ずる筈だ……。▽

母はこんな思いであるためか、特別に口外もせず、手紙も出さずに、唯ひとりで、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、

と念佛してそれで満足のように見えた。

つづく。



### ゲーテの言葉

常に自分の時代にとらえられていて、その時代にあるものからばかり栄養を受けて居る者は、その時代と共に消える泡沫である。

太陽は静止していて地球がそのままわりを廻るということは誰も疑う者はない。然し我々の感覚からは、地球のまわりを太陽が廻つてるとしか思えぬ。感覚と事実は明らかに矛盾している。

それだから人間界で、自分の感覚のみにたよることは非常なあやまちにおち易いものだ、気をつけなければならぬ。

○

同時代の有名な人だけを学んだとて何にもならぬ。幾百年、幾千年と経つてすこしも価値が落ちずに尊敬されているような著書を残した昔の偉い人を学ぶがよい。

○

我々が心から神の偉大を感じたら、啞のようになるばかりである。名前をつけて呼ぶなどは勿体なくて出来ないだろ。毎日口にする牧師などが、これを意味のない乾燥な言葉にしてしまつてゐる。

## 鷹と鳩

### 花田正夫

何時聞いたのか、何で読んだのか、サツパリ見当がつきませぬが、ハツキリ記憶にのこつている説話に、鷹と鳩の話があります。

或る日、菩薩様が野に立つていらざると、一匹の傷ついだ鳩が飛んで来て、ふるえながら訴えました。

「おたすけ下さい。鷹におそわれております。もう傷がひどくて動けなくなりました」

と。菩薩様はこの鳩をあとところに入れてかくまつておやりになりますと、飢えた鷹は、樹上から

「私の獲物をお渡し下さい。私は飢えて死にそうです。

菩薩は公平な方と聞いて居ります。鳩だけをたすけて、私共はどうなつてもよいのでしようか……」

と叫び続けました。

ふところに鳩を抱いて、じつと鷹の言い分をきいていたられた菩薩様は、やがて御自分の太腿おともを割いて、鳩の重さだけをとつて鷹に与えられました。鷹もそれで満足して、血のしたたる肉をとつて飛び去つて行きあたりに平和がよみがえりました。

×××

×××

慈光誌の第十三卷第十二号に「恩師の警策を想う」という題で柳瀬先生が書いて下さつた中に、

「私は、蛙をのまねば生きられぬ蛇なんだ。蛙をのむと人に憎まれて打ち殺されるのだ。この者に、これを食べ

て飢をしのげとの念仏のお粥は、仏様のお肉身だ。われわれは、仏を食べて生きているのだ」

と、あります一節が思ひあわせられます。

×××

糸尊が少年の頃、父王淨飯王と郊外に出られた時、木蔭に端坐していられると、何処ともなく飛んで来た小鳥が、枝を匐つていた小虫をくわえて、飛び去つて行きました。

糸尊は、それを見られて

「生き物はどうして殺し合わずに生きられないのか」と非常に悲しまれたと、阿含經にあります。この純粹な幼い御日の願いは、血のしたたる肉身、お念仏を廻施して下さることによつて始めて満足されたのであります。

×××

大無量寿經に、

「そのひかりに触れんものは、身心柔軟にして、人天に超過せん」

とあります。また歎異抄の第十六章に

「わろからんにつけても、いよ／＼願力を仰ぎまいらせし、……」

とあります。

捨身餓虎と施身闇偈の聖画を跪拝された御心中を遙察申すのであります。

權臣閥族が互に勢力を争うて血を流すこと二百余年、その後にお出ましになつた太子が、若し「怨みにむくいに恨み」をもつてせられたならばどうあつたであろうか。然し横暴をほしいままにする蘇我氏と政治をともにせられるにつけて、太子憲法十条に、

「こころのいかりを絶ち、おもてのいかりを棄て、人の

たがうを怒らざれ。人皆心あり、心各々執ることあり。彼れ是すれば則ち我れ非みす。我れ是すれば則ち彼れ非みす。我れ必ずしも聖ならず、彼れ必ずしも愚にあらず、共に是れ凡夫のみ……」

と御自身を深くかえりみられては、太子も亦菩薩の捨身の大悲を食べずにはいられない御身と自照せられたことでありますよう。太子憲法の二条に、

「篤く三宝を敬え、……四生の衆帰、万國の極宗なり。いずれの世、いずれの人かこの法を尊ばざらん。人はなはだ悪しきもの鮮し、能く教うるときはこれに従う。それ三宝に帰せずんば、何をもつてか枉（まが）れるを直さん」

とお勧め下さる中に、「何をもつてかまがれるを直さん」と自分で自分の始末のつかぬ、悪から悪、怨みから

私共はこうしたお言葉を聞きますと、すぐに結果の方に目がついて、柔和とか忍辱を切望いたしますが、それは本末の転倒であります。そうしたことの根源に、仏様の血のしたたるお肉身をお与え下さつて、飢えをしのげとの御真意のましますことが仰がれます。かくまでに施身の慈悲をおそそぎ下さるのも、如何にしても柔和になれず、忍辱にもなれず、愛憎違順して高峰岳山にことならぬ身をことにたすけんと思召し立たれはこそであります。

×××

私の心に長い間、法隆寺の金堂に安置されてあります玉虫厨子の左右両側の絵のことが深く印象されて居ります。右の側面には、薩埵太子が身を捨てて餓えた虎に与えるという本生譚を描かれてあります。

左の側面には、涅槃經の雪山童子の施身聞偈の絵が描かれています。これは有名な話で、諸行無常は生滅法、の偈文を聞いて、残りの偈文を聞きたいというので、雪山童子は羅刹に身を投げる前に、生滅滅已寂滅為樂といふ偈を教えられて喜ぶという物語の絵であります。

玉虫厨子は、推古天皇の御物と伝えられますが、その発案はもとより聖德太子によられたものであります。朝に夕べに太子が金堂にこもられ、更に御厨子の前に端坐されて

恨みに転落する者の唯一無二のすくいを、三宝の大悲に渴仰していられるのを拝するのであります。

×××

法然聖人も亦、御父君が横死される時、怨讐の彼方に大道を得よと遺言されて、一路叡山での求道の末、十惡、愚痴の身の如何ともなし得ぬ身と崩折れて、そこに弥陀大悲の誓願に破闇満願せられて、念佛報恩の人となられたのであります。

×××

鷹の性の私には、血のしたたる仏様の御肉身、南無阿弥陀仏で飢をしのぎ、生かして頂くばかりであります。

● ● ●

辯世之詩 村上仏山

独り金經を誦して小斎に坐す

満山の霜露夜蕭々たり

老年の人と残宵の月と

孤影片身俱に西に向う



## あとがき

四月の花祭りがすぎました。奈良県吉野の辻尻次郎さんから、花祭りの、喜びの呼びかけを頂き、心温まるものを覚えました。それにつけても、一般社会では、生存中にこそ誕生日を祝いますが、死後は忌日をまつるのが常でありますのに、御尊や、親鸞聖人は、永久にその御誕生をよろこび、祝ぐことは、そこに時の流れも、空間のへだたりも碍ることの出来ない、無碍の徳光を万人に光被せられるからであります。

「如来常住にして変易あることなし」とも、「常住靈鷲山」と吉聖が伝え繼がれた所もそこにあるのであります。五月の聖人の降誕会は、われひとともに衷心からことほぎまつりましょう。

XXXXXX

△近角先生の欲生釋は、三河白道の譬喩を生活に即してのお味わいを頂きました。先生のお言葉にもありますように、キリスト教で、信の旅を象徴されたものに、「天路遡程」パンヤン著があります。これは信者の間では聖書に次ぐものとして尊重されていますが、仏教におきましては、善財童子

の求道との二河白道の譬が、大切な求道者へのしおりであります。ことにこの譬が、源信僧都は非常に隨喜せられまして「この教に遭えたことは人間の所詮である」と仰せになつて居られます。この譬がそのまま私共の信生活の全体と知らされますことであります。

△福島先生の善財求道の御講話は、いよいよ最終回の前半であります。永い年月をかけて、難解な四十華嚴を中心にお説き頂きましたこと、千歳の一遇であります。ことに童子の求道が、お妃や、御母、マヤ夫人を善知識と仰がれますところとて、我々の人生問題の一番肝腎のところであります。

△池山寿夫先生の「ある日の父」は、池山栄吉先生の、父とし、夫としての信生活をあかして下さつたもので、言々句々身にします。私共には師としての先生の姿しか存じませんのに、こうしたお味わいを聞かせて頂けますことは、かけがえのないことであります。

▽堂の鉢、の雄三の母の心のひらけます姿、佐藤先生のお苦労を謝して居ります。新潟の地に、静居されて法味を頌つていて下さいますが、御健康を祈念してやみません。

## お案内

一道会館法話会。第一日曜、歎異抄、第二日曜、正信偈、第三日曜、無題。午後一時半。市電新郊通り一丁目下車。東へ一丁半。

毎月二十四日、午前午後、市内昭和区小桜町、教西寺。法話会。市電御器所通り下車。桜花学園東。

定	価	一部	二十五円(送共)
半	年	五百円(送共)	
一	年	三百円(送共)	

名古屋市南区駒上町二ノ八八

編集・発行人 花田 正夫  
印 刷 人 本 田 政 雄

名古屋市南区駒上町二ノ八八

發 行 所 慈 光 社

振替口座名古屋一〇四七〇番